

日本国民文学全集 14

古典名句集

山本健吉編

河出書房新社

日本国民文学全集 第一四卷 古典名句集

昭和三十三年九月二十日初版印刷 昭和三十三年九月二十五日初版発行

定価三四〇円

編者 山本健吉

発行者 河出孝雄

印刷者 川口芳太郎

東京都港区芝三田豊岡町八



発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話二九三七二番

振替東京一〇八〇二番

岡書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

古典名句集

俳句篇

芭蕉名句集

加藤楸邨 二

蕉村名句集

中村草田男 三

一茶名句集

荻原井泉水 五

諸家名句集上

大野林火 二〇

諸家名句集下

中島斌雄 二六

連句篇

芭蕉連句抄上

太田水穂 訳 二六

芭蕉連句抄下

柳田国男 訳 二七

俳文篇

芭蕉紀行文集

佐藤春夫 訳 二八

芭蕉俳文集

水原秋桜子 訳 二九

花屋日記

久保田万太郎 訳 三〇

風俗文選

富安風生 訳 三一

鶉衣

室生犀星 訳 三二

蕪村俳文集

佐藤春夫 訳 三三

おらが春

石田波郷 訳 三四

訳者の言葉

三〇

作家略伝・俳諧年表

井本農一 三六

解説

山本健吉 三九

装幀 原弘

俳句篇

芭蕉名句集

加藤楸邨訳

蕪村名句集

中村草田男訳

一茶名句集

荻原井泉水訳

諸家名句集上

大野林火訳

諸家名句集下

中島斌雄訳

芭蕉名句集

加藤 楸 邨 訳

一、貞門・談林の時代

(寛文年代・延宝年代の大部分)

月ぞしるべ此方へいらせ旅の宿

この句のできた寛文年代は貞門ふうの俳諧がさかんだった頃であるから、この句も貞門の古風な詞の遊戯が主になっている。すなわち、謡曲「鞍馬天狗」の、「奥は鞍馬の山道の、花ぞしるべなる。此方へ入らせ給へや」をほとんどそのままとり入れているのである。貞門のゆきかたは、この例のように、謡曲とか、物語とかの詞句を入れたり、振ったりするとところに巧を競うふうがあったのである。

寝たる萩や容顔無礼花の顔
地に伏したおれた萩の様に擬えて、容顔美麗というべきところを、寝ている様で

あるから容顔無礼といったものである。このたおれた萩を人に擬え、容顔無礼といったところに貞門ふうの発想が見られる。

たんだすめ住めば都ぞ今日の月

「たんだ」は「ただ」であり、「けふの月」は「今日の月」に「京の月」を、「すめ」は「澄め」と「住め」とをかけあわせた言葉である。「住めば都」という俗諺をとり入れて、今日の月よ、ひたすらに澄めよ、この月の下に、わが住むこの伊賀の片田舎も、住めば都の思いがすることである、という句の心なのである。俗諺を取り入れたり、掛詞を使ったりするところに、当時の貞門ふうの発想があらわれて、詞の遊戯から一步も出ていない作である。

浮かれける人や初瀬の山桜

「千載集」の「うかりける人を初瀬の山嵐はげしかれとはいのらぬものを(源俊賴)」を振ったもので、原歌の「憂かりける」は、「浮かれける」と滑稽化されている。古歌の優雅な趣を卑俗な日常の世界にひきおろしてくるところに、貞門から談林にかけての笑いがあったのである。

杜若にたりやにたり水の影

水に映った杜若が、その姿まことに相似ていると興じたのであるが、それを、謡曲「杜若」の、「菖蒲の鬢の色はいづれ似たりや似たり花菖蒲」を踏まえて発想したものであろう。

着ても見よ甚べが羽織花衣

花衣衣として、この甚兵衛羽織を着ても見よという句意であるが、小唄をとりこんで調子面白く仕立てたのである。丈の短い尻の裂けた羽織を甚兵衛羽織というが、それを着てみよというので、「貝おほひ」の判詞の中で、芭蕉は自ら、「右の甚兵衛が羽織は、きてみて我折りやといふ心なれど、一句の仕立もわるく、染め出す言葉の色もよろしからず見ゆるは、愚意の手つつも申すべく云々」と述べている。

雲と隔つ友かや雁の生き別れ

「芭蕉翁全伝」には、その主婢吟公が早生したので、仕官を辞して東武に行くとき、友人のもとに留別の句としたということになっている。あの雁の遠く雲を隔てて生き別れてゆく姿は、今故郷を遠く住み棄てて去る自分と同じことであるという意である。

二十九日立春なれば
春や来し年や行きけん小晦日

小晦日というのは、旧曆十二月三十日を大晦日というのに対して、二十九日をいう。年内に立春が来たので、「春や来し年や行きけん」ということがいわれるわけである。これは、遠く「古今集」紀貫之の、年内立春の歌「年の内に春は来にけり」とせを去年とやいはんことしとやいはん」あたりから脈をひいている。

年は人にとらせていつも若夷

当時街頭または市中の家々を紙にかいた恵比寿の像を売り歩いたものであるが、これを若夷という。これを買ひ求めて、門口に貼付けたり、歳徳棚(まごころ棚)にまつたりして福を祈ったのである。その若夷の像がいつも福々しい若い相をしているが、これは、人に年をとらせて、自分だけはいつも若しいのであらうと興じているのである。

此の梅に牛も初音と鳴きつべし

この初春を祝って、この天満宮の梅に驚も初音をあげるであらうが、牛までも、我も初音をしようと同らかに鳴き出るのであらうという句意である。この句は延宝四年二月山口信章(後の素堂)と両吟二百韻を巻い

て天満天神に奉納した中の発句であった。

我も神のひさうや仰ぐ梅の花

ひさう、は秘蔵である。謡曲・狂言では秘蔵をひさうといっている。神前には、今梅の花が美しく咲き出ている。自分もつしんでこの神の秘蔵である梅の花を仰ぐことであるという句意。芭蕉はこの句では謡曲の秘蔵という語に、「菅家後集」の、「時々彼蒼を仰ぐ」を掛けているのであらう。

佐夜中山にて

命なりわづかの笠の下涼み

今、小夜の中山を越えようとすると、頼むべき樹蔭とてもなく、炎天は身をやくようである。このわずかの笠の下蔭を命と頼んで下涼みをすることだという句意。いうまでもなく、西行の「年たけてまた越ゆべし」と思ひきや命なりけり小夜の中山」を踏まえたところが狙いで、西行の「命なりけり」とは全く異なった意味に使っているところとが談林的なのである。

富士の風や扇に載せて江戸土産

江戸の土産として何もないが、道中富士の涼しい風を仕入れて来たから、この涼風を扇にのせて進上しよう、と興じているのであ

る。非常に気軽な口軽い調子が出ているが、ここに庶民的な談林調が見られるわけである。

富士の雪廬生が夢を築かせたり

廬生が夢というのは、邯鄲の枕とか、黄梁一炊の夢とかいわれている中国の故事で、廬生という男が、邯鄲の亭で、呂翁という仙人から枕を借りて眠ったところ、富貴を極めた生涯を夢みて、さめてみると、まだ炊きかけた黄梁が煮えていなかったという話である。

富士の雪というのは、毎年陰曆六月十五日に消えて、その夜すぐ降るといわれていることなのであるが、この句では、それよりも白銀を積んだような山の形状を主としているので、この白銀の積みかさねられたような富士の山は、廬生の富貴の銀の山を築かせたようだというのである。

なりにけりなりにけりまで年の暮

謡曲の終りのところに、「なりにけりなりにけり」「着きにけり着きにけり」などという繰返しがある。年の暮になったというところをこういう謡曲の口調をとり入れて興じているのである。

猫のつま竈の崩れより通ひけり

寒の明ける頃、牝を恋うて猫の鳴きあるくのを、猫の恋とか猫の妻恋とかいうが、そこに例の談林の古典の卑俗化を試み、「伊勢物語」の「かどよりもえ入らで、わらべのふみあけたるついひぢの崩れより通ひけり」を利かしたのである。

猫の妻恋であるから、「竈の崩れより通ひけり」が利いてくるので、貴族的趣味の優雅な古典を、庶民の卑俗な日常生活にひきおろしたところが、談林の笑いであったのである。

五月雨や龍燈揚る番太郎

龍燈は龍神のかかぐる神燈のことで、この句は、番太郎の揚げる燈火をこう見立てたものである。五月雨が芒々と降りそそぐ灯し頃、あたりはまるで海のように感ぜられる。番太郎が燈火を揚げると、まるで龍燈のようだという句意である。番太郎というのは江戸時代自身番に付属した小使の称。

あら何ともなやきのふは過ぎて河豚汁

こわごわ食った河豚汁もなんのこともなく過ぎて今日になった、その、ほっとしたような、しかしどこかに、なんのことだというような気持をつかんだもの。「あら何と

もなや」は謡曲に多く使われている語で、曲もなや、とかつまらないとか、いったいどうしようとかいう気持なのであるが、この句では、文字どおり、なんともない意に用いられている。

庭訓の往来誰が文庫より今朝の春

庭訓の往来は庭訓往来で、往時寺子屋などで用いた漢文調の教科書、四季十二月の消息文範である。はじめのところに新春を賀する文があった。文庫は書籍や道具を入れるものであるから、さて春はいったい誰が文庫からとり出して読む庭訓往来から立つことであろうと興じたのである。

内裏雛人形天皇の御宇とかや

この内裏雛の治める御代は、人形天皇の御宇といったらよく釣合うであろうという句意で、内裏雛を見ていると、その御代の名が何であろうというような感じが自然に湧いてくる。謡曲「杜若」の「仁明天皇の御宇とかや」を換つてそこに人形天皇という名が思いうかんだものであろう。

わずれ草菜飯につまん年の暮

年の暮の感に発想して、菜飯の菜のかわりにわずれ草を摘んで、せめて積った憂を忘

れようと興じたもの、わずれ草をとり出したところに談林ふうがある。菜飯は、菜を細かく刻んで、熱湯を通し、塩を加えて炊きたての飯に加えて食うものであり、わずれ草は忍草であるともいわれるが、この句で見のがせぬことは、談林ふうの句でありながら、句の中にしみじみとしたものが流れていることである。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

オランダ人は当時鎖国中ではあったが、長崎で通商を許され、その使が江戸に出て幕府に参向した。「花に來にけり」はわざわざ花見に來たわけではないのだが、江戸の春を讚美してこういったものであろう。もちろん「馬に鞍」は例の謡曲「鞍馬天狗」の、「花咲かば告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠桜云々」とある一部をとり入れたものである。詞句の裁入も単なる詞句の面白さから一応出て、口調の上でも気分の上でもしっくり落ちついたものを生み出してきている。

ああ春々大なるかな春と云々

古書の口調を模して、春の悠揚とした気分を嘆じたもので、この口調そのものに談林

の奔放さが見られる。

蜘蛛何と音を何と鳴く秋の風

蜘蛛よ、お前は、他の虫がいろいろの音に鳴きかわす中であって、ひとり黙りこくっているが、この秋風の寂しさの中で、いたいなんと鳴くぞと問いかけた意である。

五月雨に鶴の脚みじかくなれり

莊子を媒介とした寓言的発想の一つで、莊子駢拇篇の、「鶴の脛は短かしといへどもこれを統げば則ち憂ふ、鶴の脛は長しといへどもこれを断てば則ち悲しむ」という句に拠っていることは明らかで、句意は、五月雨に水嵩が増して、中に降りたつ鶴の脚も短く感ぜられるというのである。

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

秋の暮にふさわしい趣を生かすために、従来よくとった和歌や謡曲の代りに、漢詩的な、枯木寒鴉の趣が発想の契機となつてゐるもので、かならずしも実感としての枯木寒鴉そのものに透過して、その実相に穿ち入って、直下に生かされたものであるといえないのである。鳥のとまりたるや、と字余りに表現されているところに、秋の暮の気分をあらわすにふさわしい道具立て

として枯木寒鴉がとられ、外から眺められているのであって、そこに談林の気分があらわれている。この字余りの弾んだ表現には、談林的な、第三者を予期した意識的なはからいが感ぜられる。その点からいえば、後年の「曠野」に収められた改案の、「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」の方がずっと醇化した句境になっている。

夜窺かに虫は月下の粟を穿つ

粟名月の句で九月十三夜である。月明りの限ない静かな世界の中に、粟の実を、虫は窺かに音もなく穿ちすすんでいるという句意。後の月の冴えわたつた静寂な気分を、他の一切の動を消し去り、渺たる粟虫が一心に粟を穿つということに強調しようとしている。

いづく時雨傘を手にさげて帰る僧

どこで時雨にあったものであろう、あの僧は傘を手にさげて帰ってゆくよという句意。後年の「猿蓑」に「僧やゝさむく寺にかへるか」という付句のあることも参考になる。

雪の朝ひとり干鮭を噛み得たり

詞書に「富家は肌肉を喰い、丈夫は菜根を

噛む」というが、自分は乏しいのでよい肉を食うなどということはできずに、菜根を噛んで粗食に甘んじてゆくという意味が述べられてある。句はこれを受けて雪の朝乾した鮭をようやく手に入れて、ひとりこれを食し、丈夫にならうものであるというので、自分の貧に耐える心をうたつたものである。

柴の戸に茶を木の葉掻くあらしかな

柴の戸に冬の烈しい風が吹きつけている。落ちたまった古葉がしきりに舞いたっているが、この嵐は茶の古葉を掻きゆく感じであるという句意で、この句の成つた延宝八年冬が、芭蕉が深川芭蕉庵に入った時であることはほとんど確定的になっている。

二、模索の時代

(延宝末期から天和年代)

春立つや新年ふるき米五升

四山瓢をよんだもの、新しい春が立つて、この庵にも春の気分が漂っている。この四山瓢には、去年の暮に門人の満たしてくれた五升の米が、そっくりつまつていて、なんとなく満ちたりた思いがすることだ、という句意で、「三冊子」によると、はじめ

「似合はしや」とあったものが、のちに、「春立つや」と改められたのである。

李下芭蕉を送る

芭蕉植ゑてまづにくむ萩の二葉かな

門人の李下におくられた芭蕉を庭前に植えて、その芭蕉の芽の成長を待っていると、思ひも設けぬ萩の芽が芽ばえて二葉をひろげてきた、芭蕉の成長をねがうにつけて、まずこの萩の二葉を憎む心になったというのである。

藻にすたく白魚や取らば消えぬべき

藻にすたくは、藻に集まる意で、藻のあたりに集まり泳いでいる白魚の清らかな透きとおった姿は、手にとつたならば、きつと消えうせてしまふにちがいあるまいという心である。この句の出ている「東日記」に才丸の「毎折て白魚のたえく青し」という句があつて参考にならう。

芽舎の感

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな

芭蕉の目のたしかに据わつて来ていることを感ずる句で、蕭条たる野分と雨とに更けてゆく夜の感じを音によつて表現した句である。「三冊子」によると、後に「野分して」

と改めたことがわかるが、それは、「芭蕉野分して」という字余りに一種のきはひが感ぜられたためであらう。

深川冬夜の感

槽の声波をうつて 腸氷る夜や涙

草庵の荒涼たる寒夜の様と、この寒夜の物音にじつと聴き入っている孤独の姿である。全句漢詩的な調子で発想せられて、感動の重さが、かえつてこの信屈な口調によつて支えられるという結果になっている。

雪の 鮎 左勝水無月の鯉

「虚栗」は其角の編になるものであるが、想の新しい形の新を熱心に追求した。とくに、形のほうは思ひきつて奔放で奇矯に近いものが多かった。この句も、句合の判詞の体に仕立てたもので、句合では右勝とか、左勝とか、勝負のないときは持とかいふ判詞をくだす。今、杉風の庵で、六月にふさわしい洗鯉を饗せられたのであらうが、雪の頃の河豚料理もよいが、この六月のすがすがしい洗鯉にはおよばないというのを、左勝という語であらわしたのである。

朝顔に我は飯食ふ男かな

詞書に、「角が蓼蟹の句に和す」とある。「虚栗」に其角の、「草の戸に我は蓼くふ蟹かな」という句がある。これが、「角が蓼蟹の句」である。其角の句は、自分は世をのがれ、草の戸にこもつて世と交わらぬものであるという意味で、脱俗を衒つた厭味がある。芭蕉はこれに「和す」といってはいはるが、言外にいましめてゐることは明らかである。

其角は市塵に泥まず、蓼くう蟹のごとき世外の人であると自任しているが、自分ばかりが、世俗の人のごとく夜は寝ね、朝は早く起きて、爽かな朝顔の花にむかつて平凡に飯を食う男である、という句意である。

老杜を憶ふ

髭風を吹いて暮秋喚ずるは誰が子ぞ

暮秋蕭条たる風の中に、杜甫を憶ひ、杜甫を慕ひ、杜甫の詩形までとり入れようとしている句である。こういう暮秋の喚を、老杜は、「藜に杖つき世を喚ずるは誰が子ぞ、泣血空に迸らしめて白頭を回らす(白帝城最高楼)」と詠じている。「髭風を吹いて」というのも、漢詩の倒装法に学んだもので、髭を風が吹きさらす感じをいつそう強めていふ。

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

詞書にもあるように、手ずから泔笠をはって、それに興を発し、敬慕していた宗祇の「世にふるは更に時雨のやどり哉」という句を心において詠じたもの、宗祇の詠んだように、この笠の下にやどって世を経るのも、時雨の降る中で、一時笠の下にやどるような、かりの宿であるという意である。

茅舎水を買ふ
氷若く偃鼠が咽をうるはせり

貧しい生活の実際から発想して、莊子の語を用いて一句としたもの、買ひ求めておいた水も氷って、その一片を嘔んで渴を医すのだが、それも苦い感じがするという句意で、その、「若く」に生活の苦さが感ぜられるようである。偃鼠云々は「莊子逍遙遊」の、「鶴鶴深林に巢くふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飲むも満腹に過ぎず」を引いたものである。偃鼠はどぶねずみのこと。

夜着は重し呉天に雪を見るあらん

寒夜、雪の来ようとするきびしい気配を感じて、漢詩を契機として仕立てた句。夜着を重ねると、ずしりと重い感じがする、この寒さでは雪が来ることであろう、という意で、それを漢詩の、「笠は重し呉天の雪」

という句をとり入れて仕立てている。

まとうどな犬ふみつけて猫の恋
まとうどというのは愚直ということで、元来犬を恐れる猫ではあるが、春めいてきて、猫の妻恋の頃になると、愚直な犬を踏みつけるようにして恋いあるくことよ、という句意である。

花にうき世我が酒白く飯黒し

この句は、「白氏文集」の、「草合して門に径なく、煙消えて甃に塵あり、憂へてはまさに酒の聖を知り、貧しては始めて錢の神をさとり」という詩句の後半をそのまま前書としている。世間は花に浮かれて華やかであるが、自分は濁り酒と春の充分でない餓飯とが貧の中に侘しく暮しているという意である。

馬ほくぼく我を絵に見る夏野かな

芭蕉庵焼亡後、甲斐に流寓していた頃の句と見られるが、馬がゆるやかに単調に夏の野を歩いてゆく、その背にゆられている自分も、思えば絵の中の人物のように、この夏野の一点景として趣があることだということである。季吟の、「一僕とほく／＼ありく花見哉」が遠くひびいているようである。

ふたたび芭蕉庵を造り當みて
靴きくやこの身はもとの古柏

再び草庵ができて今夜はしみじみ靴を聴いている。庵は新しくなったが、自分はやはりもどおりの古柏の身であるという意である。折しも古柏に靴があたっていたものであろう。さきに杉風らの好意で得た庵も火災のためにうしななって、甲斐に流寓していたが、今、素堂らの勸化によって、知友門人の厚意は芭蕉庵復興ということになり、再び安住の処を得た。その庵の中に坐して、自己の姿をかえりみたときの、しみじみとした独語がきこえるような句である。

仙風が悼

手向けけり芋は蓮に似たるとて

仙風は杉山市兵衛、芭蕉の門人杉風の父である。仙風がなくなつたので、成仏をいのって蓮の葉をたむけるところであるが、とりあえず蓮の葉に似ているというところから、芋の葉を仏前にささげたという句意で、悼句ではあるが、死者に対して親しいとりつくるわぬ感じが出ている。

三、野晒紀行前後

(注として貞享元年野晒の旅と同
四年までの芭蕉庵生活のころ)

野晒のざらしを心に風の沁しむ身みかな

貞享元年秋八月、芭蕉は門人千里を従えて、名高い野晒の旅に上った。江戸を出て東海道から名古屋に入り、ここの俳人と「冬の日」の作品を生み、郷里伊賀に入り、京畿に入っている。その紀行文が「甲子吟行」とも「野晒紀行」とも「草枕」或は「芭蕉翁道の記」とも呼ばれて、芭蕉俳諧の展開の上から最も注目すべきものの一つである。冒頭の一句がこれで、「貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の声をよる寒げなり」とあってこの句がある。今旅立たんとするにあたって、行路にたおれ、白骨となって横たわる自分の姿が、心に描かれている。折しも秋八月のこととて、動きそめた秋の冷気が、身に沁みこんでくるようであるという意である。

秋十年却つて江戸を指す故郷

江戸を出て故郷へ向かうのであるが、十星霜に近い歳月を過ぎた江戸は今はいかえって故郷のようなつかしさを覚えしめるというのである。この句は、賈島の「桑乾を渡

る」という詩、「客舎并州すでに十霜、帰心日夜咸陽をおもふ、端なく桑乾の水を渡り、かへりて并州を望めばこれ故郷」を踏まえていることは明らかである。

猿を聞く人捨子すてこに秋の風如何いかに

富士川のほとりで捨子を見て詠んだ句で、猿の声は聞くに腸を絞るような哀調があると古来人に言われているが、その猿の声を聞く人よ、捨子に秋の風の吹きあたるのを見て、猿声といずれをかなしく思うかと、問いかける体に発想したのである。

道の辺の木槿むくげは馬に食はれけり

馬上歩を進めている。と、道のほとりに咲いていた木槿が、ひよいと自分の乗っていた馬に食われてしまった、という眼前の小景である。今までの句は出る杭は打たれるというような諷刺の意に解せられ、子規でさえそうとっているが、馬上吟とあるのだから、それでは歪曲したことになる。やはり、自然に素直に立ち向かう目が、この旅の間に次第にできているものとするべきである。

馬に寝て残夢月遠し茶の烟ばな

「甲子吟行」に、「二十日あまりの月かすか

に見えて、山の根ぎはいと闇きに、馬上鞭を垂れて、数里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りて忽ち驚く。」という文がある。払曉馬を歩ませていると、夢は醒めきれないで、馬上でうとうとしていたが、ふと気がつくと月が西の空にはるかに薄れて、あたりの軒からは朝の茶を煮る煙がゆるやかにたちのぼっていたというのである。発想は杜牧の「早行詩」によっている。

芋洗せんふ女西行せんならば歌詠まん

「西行谷の麓に流あり。女どもの芋洗ふを見るに」と「甲子吟行」にある。西行谷は伊勢の菩提山の西で、西行隠栖の地。芋を洗っている女たちに興を惹かれ、西行のことが思い出された。あの芋を洗う女を見て、もし西行だったら定めし歌を詠んだであらうという意で、西行ならば歌であるが自分はこの意で、やや遠慮がちな興じ方なのである。

蘭らんの香かや蝶てつの翅つばさにたきものす

「甲子吟行」に「其の日のかへるさ、ある茶店に立寄りけるに、てふといひける女、あが名に発句せよと言ひて白き絹出しけるに書付け侍る」とあって、香ばしい蘭の花に

蝶が翅を休めている、その蝶のような美しい衣裳に香をたきしめているようである、とその蝶という女の感じを挨拶ふうによみ出でたものである。

薫植あて竹四五本のあらじかな

閑人の茅舎を訪れてみると、薫が植えてあり、竹四五本が初嵐にざわめいている。その簡素な趣に閑人らしい生活を把握しているので、他の一切は句の底に沈めてしまっている。

手に取らば消えん涙ぞあつき秋の霜

「長月の初め故郷に帰りて、北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの髪白く、眉皺よりて、ただ命ありてとのみ言ひて言葉はなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたり」と、「甲子吟行」にあつて、この句がある。なき母の白髪を見ると、涙はその上に落ちるのであった。この細い弱々しい白髪は手にとつたならば、折からの秋の淡い霜のように消え失せてしまうのではないかという意である。

礎打ちて我に聞かせよや坊が妻

「甲子吟行」に「昔よりこの山に入りて世を忘れたる人の、多くは詩にのがれ、歌に隠る。いでや唐土の廬山といはんも亦むべならずや」とある。この山というのは吉野山で、従つて、坊が妻は僧坊の妻である。吉野に入った芭蕉は堪えがたいもの寂しさを感じて、せめて礎でもうちならして、わが堪えがたい旅心を慰めてほしいと呼びかけているのである。

露とくとく試みに浮世すがばや

眼前の「とくとくの清水」を見ながら西行の歌と伝えられている。「とくとく」と落つる岩間の苔清水くみほす程もなきすまひかな」を心においた発想で、西行の庵の跡には今も清らかな露が昔のままにとくとくと落ちつづけている。この露の雫によつて俗塵に汚れた心身を洗い清めたいものだという意である。

御廟年を経てしのぶは何を忍草

「甲子吟行」に「山を登り坂を下るに、秋の日すでに斜になれば、名ある所々見残してまづ後醍醐帝の御陵を拝む」とある。御廟は歳月を経て忍草が生いまつわっている。忍草はその名にかけて、いったい何をしのんでいることであろうという意である。一

読激しい懐古の情に迫られた口調が感ぜられる。

秋風や藪も鳥も不破の関

昔、三関の一として厳しく人をとどめた不破の関も、今は跡形もなく荒廢して、ただ見るものは藪と鳥に秋風の吹きわたるのみである。この藪も鳥も古の関の址であると思うと、まことに感慨に堪えぬものがあるという句意で、「新古今集」の後京極良経の歌「人住まぬ不破の関屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風が」発想の契機になっている。

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

「甲子吟行」に、「大垣にとまりける夜は、木因が家があるじとす。武蔵野出でし時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ」とある。「野晒を心に風の沁む身かな」と詠じて江戸を出てからこの長途の旅の間、病身な芭蕉は旅の艱苦に身をさらし、野晒を心に思い描きながら、死と直面しつづけて来たものであろう。

曙や白魚白きこと一寸

「甲子吟行」に、「まだほのくらきうちに浜の方に出て」とある。「三冊子」などによると、「雪薄し」が初案であった。初案であ

ると雪の薄く敷いた海辺に白魚があげられている。見るとまだ一寸ばかりの白さであるというのである。「曙や」となると、あたりが薄明の中におかれ、その薄明の中に白魚の一寸ばかりの白さがいきいきと生動してくる感じがある。

狂句木枯の身は竹斎に似たるかな

「甲子吟行」には、「名護屋に入る道のはど風吟す」とあり、「冬の日」には、「笠は長途の雨にはころび、紙衣はとまり／＼のあらしにもめたり。佗つくしたるわび人我さへあはれにおほえける。むかし狂歌の才士此国にたどりし事を不図おもひ出で侍る」とあつて、長途の旅にやつれた己が姿を「竹斎物語」の竹斎に比している。

竹斎は烏丸光広作といわれる「竹斎物語」の主人公で、山城の隠士であるが、名古屋に来て医を業とし、至るところ失敗して狂歌を詠んでいる。その風狂の隠士竹斎に自らを比しているのである。狂句というのは竹斎の狂歌に対して、我は狂句と興じた心であろう。

草枕犬も時雨るるか夜の声

時雨の夜旅寝している心は沈みがちである。ふと犬の聲が闇の奥からきこえてきた。

あの犬も時雨れているものであるか、夜更の鳴声が堪えがたくさびしく感じられる、という句意。

からからと折ふしすごし竹の霜

霜の冴えた寂たる中に、からからと触れあう竹の音をとらえ来つて凄涼なる趣を詠んだもので、自然の微に穿ち入って力のある作である。

市人よ此の笠売らう雪の傘

市の人々よ、自分はこの笠を売らう、雪の傘として、と興じているのである。物売る市の人々の間を、自分は雪を見ながら歩いている。そういう時、ふと風興の心が萌して、こう呼びかける体に発想しているのである。

馬をさへながむる雪のあしたかな

桐葉亭での作で、雪中旅人の通るのをながめているのであるが、「馬をさへ」というところに、雪の中をゆく人の風情も面白いが、平素見馴れた馬までもこの雪の中を通るときはつくつくとながめられることだ、と自ら驚くような気持が出ている。

海暮れて鴨の声ほのかに白し

「甲子吟行」に「浜辺に日暮して」とあるように、闇が海上に次第に濃くなってゆく、沖のほうから鴨の聲がほのかにきこえてくる。海の上にはどこかにはの明りが漂っている、そういう感じを、「鴨の聲ほのかに白し」と表現したのである。

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

「甲子吟行」には、「爰に草鞋をとき、かしこに杖をすてて、旅寝ながらに年のくれければ」とある。笠をかぶり、草鞋を穿いて旅の中にありながら、いつしか歳暮になつたという感懐を、いたずらに嘆きもせず、悟り顔もせず、自分があるがままの姿を投げ出すことによつて表現しているのである。

春なれや名もなき山の朝霞

伊賀から奈良に出る途中の吟で、平素ならば見すごしてしまふような、名もない山にも朝霞がなごやかにかかっている趣がある。さすがに春であるからであろうという句意で、静かに旅をたのしんでいる余裕のある目が感ぜられる。

水取や氷の僧の杓の音

奈良東大寺二月堂の水取を見ての句である。水取は修二会的主要な行事の一つで、

毎年二月一日から十四日まで（現今では三月一日から十四日まで）国家安泰を祈禱するのが二月堂の行である。七日と十四日の夜に水屋の若狭井において、午王を貼する一年中の水を汲むのを水取といひ、この間東大寺の僧は二月堂に参籠し、昼夜行法を行うので、これを籠りといっている。参詣者も仏前にあつて籠りをするを許されているので、芭蕉もそれに加わつた一人であらう。

緊張して待つていと、深夜、内陣を走る練行衆の沓の音がきびしく耳に入つてくる。お松明の中を堅固な修法に寝られてはいるが、緊張しきつた僧が、氷のような厳しさを感ぜしめながら、沓の音をひびかせているのだという句意である。

山路来て何やらゆかし葦草

初案は「三冊子」によると、「何となく何やら床し」であつた。恐らく大津あたりの山路のことであらう、ひとり歩いていると、ふと目についた葦草に心のゆらめきを覚えた、そのゆらめきのままに、「何となく何やらゆかし」としたのであるが、後に「山路来て」と改案したものであらう。対象から受けた感動にそのまま素直に従つた発想で、真実なものに対して感合してゆく態度

がはつきりとうかがわれる作である。

辛崎の松は花より朧にて

朧夜の湖水のほうとした薄明りの中に花と辛崎の松とが見えている、よく見ると、花よりも松の朧のほうがかえつて面白く感ぜられるという句意で、花の朧は古来言い古されていゝるが、「湖水の眺望」とあるように、湖の薄明りの中に松の朧の趣を見出したところが句眼なのである。

躑躅いけてその蔭に干鯨割く女

茶店にやすんだ折の躑躅の景で、いけてゐるのは山躑躅の類であらう。描写は明らかで、静的で絵画的な冷たさを覚えさせる。

菜畑に花見顔なる雀かな

菜畑の雀のふるまひのたのしげなところを、折から菜の花のさかりなので花見顔と把握したのである。暖かみのある句で雀らしさをしっかり見定めたものである。小さいものへの愛憐の目が出ている小品である。

命二つの中に生きたる桜かな

土芳が芭蕉に逢いたいというので後を慕つた。水口で三十年振りに対面した時の芭蕉

の感懐がこの句である。この二十年の歲月を隔てて相逢う思ひが、「命二つ」というしりと重い表現によく生かされ、それが「の」を通して「生きたる」に流れこんでいる。歲月を隔てて相對した二人の命の間に、今桜も生きてゐる、自分たちも生きて相逢うことができたという感懐は、遠く、「命なりけり」と詠じた西行の心を響かせてここに生かされている。

蝶の飛ぶばかり野中の日影かな

見渡す広野には春の光がさんさんと降りそそいで目を遮る影ひとつない。時折ゆらゆらとこの春日の光の中に影を落して過ぎるものは蝶ばかりであるという句意で、春の大景を小さな蝶の羽影のゆらめきを通してつかんでいる句である。

牡丹薬ふかくわけ出づる蜂の名残かな

桐葉に別れて東武へくだる留別の句で、自己を蜂、桐葉を牡丹に比したものの、その厚意を離れて江戸にくだるうとするにあつて、牡丹の薬ふかく抱かれていた蜂が薬を分けて飛び去ろうとするにも似た名残惜しさを感ずるといふ意である。

行く駒の表になぐさむやどりかな